

世界との接し方

人間社会は、世界環境の上に浮かぶ島のようなものです。人間が生き物である限り、重力をまぬがれないとの同じで、世界とどこかで接し、糧を得なければなりません。農林水産業は、接点で、行われる生業(なりわい)で、中断は許されません。

私たちは、人間社会の内側へ向かって、生産物を送り出しているわけですが、製品の元になる土、水、空気、光は、世界環境頼みです。接点では、実に多くの作業が継続し、よい土、水、空気が取り込めるように、手入れされ、この過程で、多くの人の心を安らかせる景観は生まれ、いらぬイノシシや竹などは、押し返されます。

というような話は、ご存知のように、かつての話。

かなりデリケートで、地形をなぞるような手間仕事の、担い手は、激減しています。にじみ出るものをすくい取るような接し方、重力を喜びに変える魔法がほしいのです。

ですから、農家が、生き残りをかけて強くなれ、という話ではなく、人間社会が、全力で接点をなんとかしようとしなければ、間に合わない。そんな作業に、手をたずさえ集う人々が、農林水産業を営むことになる、というのが、本当の話です。

哲学者の内山節(たかし)さんが、東京新聞の「時代を読む」というコラムに、3月1日、「自己主張だけの農業政策」で、以下のよう



ように書いていました。(晃)

人間は、おおいなる自然に感謝し、その無事を願い、支えられて生きるしかない。自然という他者の声を聞きとろうとする姿勢は、さまざまな他者に対しても同様に、他者あつての自己という関係性の持ち方をさせていた。でも、今の日本は、自分のやりたいことをやる、というだけの雰囲気政治から社会までを覆っていて、それが強さだというような社会ができ上がってしまったのである。(中略) 私たちは、いまこそ、大いなる自然と人間の間を語らなければならないはずである。

あれやこれや

TPP(環太平洋連携協定)が、秘密のうちに進んでいます。「TPPを推進する勢力のねらいは、日本の地域社会や農業に対する、やりたい放題の総攻撃をして、自分たちが市場を強奪できるルールに変更することなのだ、今回の安倍政権の農協改革は、TPP反対の結集力をそぐことが目的の一つ」と、日本農業新聞の3月5日のコラムに、東大の鈴木宣弘教授が書いています。

このTPPIについて、寄居町で一緒に活動した先輩が、今度の町議選に立候補することになりました。私たちとしては、寄居町のはずれで農業に携わる者の一員として、町政へ新しい風穴をあけてもらいたいと応援しています。大いなる自然と他者に耳傾ける、地域の政治を、一緒に実現できたらいいなあ、と思っています。

度重なる会議や、印刷物の作成やポスティングなどで、ずうっと「たより」の発行ができませんでした。畑作業の方は、ほぼ順調に進んでいます。野菜セットの方は、一番厳しい端境期です。加工品や「ノラのパン」などでこの季節を感じていただきつつ、早く「本当の春」を迎えたいところです。(泰子 3月6日)

